痰飲頭痛について

峯 尚志 先生

峯クリニック

1985 年　熊本大学医学部 卒業
1986 年　医療法人木津川厚生会加賀屋病院にて三谷和合先生に師事
1999 年　上海中医薬大学 短期留学
2004 年　峯クリニック 開設

はじめに

三国志の時代、魏の曹操の偏頭痛を治した名医華佗のお話である。ある日、華佗のもとへ二人の大臣が訪ねてきた。二人とも同じような頭痛に悩まされ華佗の診察を受けたのだが、一人は風寒の邪に当たった頭痛として辛温解表薬を与え、もう一人は食べ過ぎが原因として消化薬を与えたところ、二人の頭痛はすぐに治ってしまった。同病異治のエピソードとして語り継がれている。

さて、頭痛の国際分類では、飢餓による頭痛という分類はあるが、食べ過ぎによる頭痛という記載はない。しかし東洋医学には「痰飲頭痛」という考え方がある。

痰飲頭痛とは

痰飲とは体内の水液代謝が停滞することによって溜まってくる病理物質で、粘調なものを「痰」、清希なものを「飲」と呼んでいる（**表 1**）。気管支から喀出する痰はもちろん、体中のあらゆるところに溜まる病理物質、たとえば体内に溜まる脂質も私は痰と表現してよいと考えている。

糖分や脂肪の過剰摂取と運動不足によって起こるメタボリック症候群は、東洋医学でいう痰飲病と非常に近い疾患概念である。体のあらゆるところに溜まった痰は、その組織に炎症を引き起こすことが最近明らかにされている。

そこで今回は、肥満やメタボリック症候群で起きる頭痛である痰飲頭痛について紹介する。

表　1　痰飲の概念

◆痰飲とは体内の水液代謝が失調し、身体のある部位に停滞することによって発生する病証をさす。
すなわち人体に生じる水飲病を総称して痰飲という。
粘稠なものを痰、清希なものを飲と呼ぶ。

◆水飲病は多くの場合、肺脾腎の機能失調、三焦の気化障害により水飲が輸布できなくなり、発症する。
治療では温補脾腎、化飲利水を原則とする。

症例 1　34 歳　男性

主訴：頭痛

現病歴：広告代理店に勤務しており非常に多忙である。もともと片頭痛があり、仕事のストレスから首・肩のこりがひどくなり、締め付けられるような頭痛も加わり、3 日に 1 回は冷や汗が出て倒れそうになる。さらに、耳が聞こえにくい、睡眠も不良で朝までに 4 回も目が覚める、歯根に膿が溜まり 2 ヵ月ごとに切開排膿している、身体が重くだるく、異常に疲れるというような多彩な訴えがあり痔も併発していた。

現症：身長 163cm、体重 65kg。脈は弦、滑。舌はやや紅色で、黄白膩苔を認める。腹診は肥満して膨満、臍下部に圧痛を認める。咽が乾いて冷たい飲み物をたくさん飲む。また、食生活も乱れていた（**図 1**）。

図1　症例1の現症

◆脈：弦、滑。
◆舌はやや紅色で、黄白膩苔。
◆腹部は肥満して膨満。
◆臍下部に圧痛あり。
◆咽が乾いて冷たい飲み物をたくさん飲む。
◆食事もこってりしたものが好きで、家ではカップラーメン。外食が多く、牛丼、ラーメン、カレーなど。缶コーヒーやアイスクリームもよく食べる。激辛が大好き。

経過：食事指導を行い、竜胆瀉肝湯合通導散で大黄、芒硝を加減した煎じ薬を処方したところ、2 週間で身体が軽くなり、4 週間で頭痛は完治した。さらに、

倦怠感、不眠、痔、歯根の膿、難聴もすべて改善した。

湿熱体質は、本症例のように湿と熱が身体中に溜まっている病態で、肥満して腹部の脂肪が多く、暑がりで汗かき、赤ら顔、脂っこいものが大好き、身体が重くだるいという特徴がある。

症例２　39 歳　男性

主訴：後頭部の熱感と頭痛

現病歴：半年前より、頸や肩の牽引痛がある。特に夜や飲酒後にひどくなる。後頭部が熱を持ったような感じがしてズキンズキンとした痛みがあり耐え難い。

現症：身長 171cm、体重 87kg と肥満気味である。血液検査ではγ-GTP が 140 IU/L と高値だが、その他に特記すべき異常を認めない。血圧は正常であった。

東洋医学的所見：腹部は膨満して脂肪太り、腹力は 5/5 で実であった。舌は紅色で胖大、歯痕、白苔を中等量認めた。脈は沈弦で力がある。全身がだるく重く感じ、疲れやすい。暑がりで汗をよくかく。寝汗をかく。過食傾向で常に胃もたれを自覚する。

経過：以上の所見より、湿熱証と判断したが、後頭部の熱感が強いことから、熱の治療を優先し黄連解毒湯を処方した。服用１週間で頭痛は3/10となった。また、仕事帰りの電車で頸と肩がだるくてしようがなかったが消失した。服用２週目より防風通聖散合黄連解毒湯エキスとし、現在は防風通聖散合通導散（煎じ薬）を処方しているが経過は良好である。

症例３　14 歳　男性（湿熱と脾虚）

主訴：頭痛、全身倦怠感

診断：脂肪肝

現病歴：7 歳の頃から慢性頭痛があり、最近では頭痛が増強して、時に学校を休むようになったため、当院を受診した。頭痛は前頭部で拍動性である。

現症：身長 167cm、体重 71kg と大柄である。一年前より脂肪肝が判明し、二陳湯、呉茱萸湯の処方を受け、食養生に努めていたが全く改善しなかった。硬式テニスの選手であったが、最近では倦怠感と頭痛のため、テニスも休みがちになってしまった。

東洋医学的所見を示す（**図２**）。その他の所見からも湿熱を窺わせる所見を多く認めた。

経過：湿熱の治療から始めるため、竜胆瀉肝湯（煎じ薬）を処方したところ、体が軽くなり頭痛は消失した。しかし食欲が低下し、不眠や臍下部の圧痛は残ったままであったので、防風通聖散合桂枝茯苓丸加薏苡仁（エキス剤）を処方したところ、胃腸の調子は改善し、すっきりしたとのことであった。

その後、雨の前日には、頭痛がする、走ると大量に発汗し体重が減少する、身体が重くてだるい、朝起きられない、眠りが浅い、お腹が冷たいと訴えた。脾虚による水滞の治療が必要と判断し、半夏白朮天麻湯合五苓散を処方した。すると頭痛は消失し、お腹が暖かい、睡眠の質がよくなった、それでも朝は起きにくくて汗をたくさんかくということであった。そこで、衛気虚の処方である桂枝加黄耆湯を半夏白朮天麻湯に合方したところ、朝起きにくいという症状を含めすべての症状が改善した（**図３**）。

図2　症例3の現症

◆腹部はぽっちゃりと肥満している。腹力は 3/5。臍下部に圧痛を認める。舌は淡紅色、胖大で正中溝があり、苔は薄い。脈は沈、弦。

◆暑がりで汗をよくかき、体が重くだるい。冷たいものが大好きで、のどが渇いてたくさん飲む。異常に疲れやすく腹が張って痛いときがある。もの忘れが多い。ガスがよくたまる。鼻水がよくでる。最近体重の増加がある。便通は一日に５～６回、普通便。夢が多く、眠りが浅い。

図3　症例3の経過

		先瀉後補
6/23	湿熱証	舌所見からは脾虚の存在が考えられる。症候、腹証から湿熱症と判断。
	竜胆瀉肝湯（一貫堂、煎剤）	体が軽くなり、頭痛が消失。食欲がなくなった。不眠。臍下部に圧痛。
7/14	瘀瘀互結証	
	防風通聖散合桂枝茯苓丸加薏苡仁（エキス剤）	胃の調子改善。体が軽くすっきり。
9/15	脾虚水滞、風痰上憂	雨の前日に頭痛。走ったら３kg 体重が減る。体が重くだるい。朝起きにくい、浅眠。お腹が冷たい。
	半夏白朮天麻湯 7.5ｇ 五苓散 7.5ｇ	頭痛消失。お腹が温かく感じる。浅眠消失。
11/10	衛気虚	朝起きにくい、多汗。
	半夏白朮天麻湯 5.0ｇ 桂枝加黄耆湯 4.0ｇ	朝の弱さがなくなり、スッキリ起きられる。すべての愁訴が消失。

まとめ

メタボリックシンドロームは、東洋医学では痰飲病の範疇に入り、それが原因で起こる頭痛を痰飲頭痛と呼ぶ。痰飲は寒痰と熱痰に分けることができるが、肥満者では熱痰となる症例が多い。湿熱の治療薬である竜胆瀉肝湯、防風通聖散、黄連解毒湯などが有効だが、これらの方剤は標治だけではなく本治を兼ねる。痰飲と瘀血はしばしば同時に存在し、痰飲互結症として駆瘀血薬を併用すると、さらに治療成績が向上する場合が多い。